



塩田朋子、高橋正徳、亀田佳明



文学座公演《ガラスの動物園》 普遍性を持つある家族を描いた、追憶の劇

テネシー・ウィリアムズ作
文学座による新訳・新演出

戦後アメリカを代表する劇作家テネシー・ウィリアムズ(1911-1983)の作品は自伝的要素が強く、特に精神疾患で生涯のほとんどを病院で過ごした姉のローラから大きな影響を受けている。代表作で映画にもなった《欲望という名の電車》(1947年初演)やピューリッツァ賞を受けた《やけたトタン屋根の猫》(1955年)を始め、姉の面影がヒロインに投影され、繰り返して描かれてきた。そんな彼の出世作である《ガラスの動物園》(1945年)が今年、文学座の新訳新演出でステージに登場。同劇団にとって29年ぶりの上演ということで話題を呼んでいる。

物語の舞台は1930年代のセントルイス。かつては上流階級にいたという記憶から逃れられない母親アマンダ、不自由な足を気にして世間から引き籠もり、ガラス細工の動物たちにだけ心を許す姉のローラ、そんな二人を棄てきれず、文学を愛好しつつも一家を支えるために靴会社の倉庫

で働く弟のトム、の3人が暮らす母子家庭。出口の見えない彼らの生活に、ある日ジムという青年の来訪によって一筋の光が差し込む様子が描かれる。

魅力的なキャストینگ
現代にも通じるテーマ

アマンダ役には、前回(1990年版)ローラ役だった塩田朋子を起用。語り手であるトム役に亀田佳明、ローラ役に永宝千晶、ジム役に池田倫太郎と実力派の若手を揃えた魅力的なキャストینگ。これまで数多くの現代作家の新作を手掛けて、小劇場から大劇場まで精力的に活動を展開、地方劇団や公共団体・学校などで演劇ワークショップの講師としても活躍する高橋正徳が演出を担当。加えて小田島恒志による新訳でも注目を集めている。

「1945年、終戦の年に初演されたこの戯曲は70年以上経った今でも古臭さを帯びることなく、むしろ新鮮な驚きをもって読むことが出来る。それはここで描かれている家庭が極めて現代的な問題を扱っているからである。家族それぞれが生活の中で自身の理想とのギャップを抱えて、みな非現実(過去あるべき姿の自分、未来に居場所を求めること)で家族という逃げたい現実を維持している」と、高橋正徳は語る。トムの「追憶劇」であるこの芝居は、トムの懺悔と告解のための芝居でもある」とも。

これまで1950年(アーヴィング・ラッパ監督)と1987年(ポール・ニューマン監督)と2度映画化されており、原作戯曲も新潮文庫(小田島雄志による名訳)で入手できるので、翻訳劇が初めてという方にも是非、お薦めしたい。

【東端哲也】

【公演情報】

文学座公演《ガラスの動物園》

作:テネシー・ウィリアムズ/訳:小田島恒志/
演出:高橋正徳
2019年6月28日(金)~7月7日(日)
会場:東京芸術劇場 シアターウエスト
出演:
塩田朋子(アマンダ)
永宝千晶(ローラ)
亀田佳明(トム)
池田倫太郎(ジム)
入場料(全席指定)
一般:6,000円、夜割:4,000円(6/28、7/1)
夫婦割:10,000円
ユース(25歳以下):3,800円
中・高生:2,500円
チケット取り扱い(文学座)
0120-481034
(10:00~17:30 ※日祝を除く)

お問合せ:文学座 03-3351-7265
(10:00~18:00 ※日祝を除く)
【前売り開始 5月27日(月)】